

University Academic Repository

Geoffrey Chaucer作The Canterbury Talesの'The Miller's Tale'における多義語の翻訳について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): translation, modernization, polysemy, ambiguity, epithet 作成者: 野口, 美咲, ノグチ, ミサキ, Noguchi, Misaki メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/203

Geoffrey Chaucer 作 *The Canterbury Tales* の ‘The Miller’s Tale’ における 多義語の翻訳について

Translating of The Polysemous Words in The Modernizations of
‘The Miller’s Tale’ in Geoffrey Chaucer’s *The Canterbury Tales*

野 口 美 咲

Misaki Noguchi

<要 約>

本稿は、異言語間におけるものではなく、時代を超えた同一言語内の翻訳、つまり「現代語訳」を取り上げ、そこに起こった言語現象について論じるものである。翻訳の対象となる作品は、14世紀に書かれた Geoffrey Chaucer の *The Canterbury Tales* と、18世紀に書かれた3つの現代語訳（Cobb (1712)、Smith (1713)、訳者不詳 (1791)）である。3つの現代語訳を比較する過程においては、18世紀当時の翻訳事情や翻訳者の社会的地位に関しても言及する。特に、解釈に幅があり、従って翻訳も難しくなる多義語 “hende” と “sely” の2語に注目した。

Chaucer の作品は、“hende” や “sely” に代表されるような多義語を、故意にさまざまな場面で用いることによって、Chaucer 特有の皮肉が作品中いたるところにちりばめられている。しかし翻訳された当時、すでに2つの語は Chaucer の時代と同様の意味を持たないどころか、廃語となってしまっており、単純な語の入れ替えだけでは訳しきれなかったはずである。それぞれの語は、18世紀当時のほぼ等価（equivalent）と思われる語に置き換えている翻訳がある一方、使う場面ごとに適用する訳語を変えているものもある。訳者がどちらの手法を採ったとしても、読者は作品（原典）を構成する表現や、良い意味での曖昧さを十分に味わうことができない。これは、翻訳という作業（操作）そのものによって、文学作品の持つ楽しみが減じられているということを意味する。

<キーワード>

翻訳 (translation)、現代語訳 (modernization)、多義性 (polysemy)、曖昧性 (ambiguity)、定型形容表現 (epithet)

1. はじめに

「翻訳」という語から一般的に、はじめに思い浮かべられるのはおそらく、ある言語から他の言語への翻訳であろう。しかし本稿で取り扱う翻訳は、そのような異言語間の翻訳では

なく、時代を超えた同一言語内における「当時の現代語訳」である。異言語間の翻訳、特に 'The Miller's Tale' の日本語への翻訳は、「現代語訳」という本稿の趣旨からは逸脱するものであり、異言語間の翻訳比較は別の研究として扱われるべきであると考え、本稿では日本語訳には触れないことにする。こうした翻訳のさまざまな種類に関して、Roman Jakobson (1959:232-239) は以下の3つのタイプに分類している。

- (1) intralingual translation : 同一言語間の翻訳。古典の現代語訳やその逆、またある地方の方言で書かれたものを共通語で書き直したり、ほかの地方の方言で書き直したりする活動がこれにあたる。
- (2) interlingual translation : 現代、「翻訳」という語を聞いて一番初めに頭に浮かぶ種類の翻訳である。ある言語から他の言語への翻訳のことを指す。
- (3) intersemiotic translation : 絵画、音楽、映画など言語以外の記号への翻訳。

近年では、翻訳研究がさかんに行われるようになってきているが、そのほとんどは interlingual translation つまり異言語間の翻訳であり、本稿で議論しているような「現代語訳」つまり intralingual translation の研究は希少なものである。

本稿で取り上げる作品は14世紀に Geoffrey Chaucer によって書かれた、今でも不朽の名作のひとつに挙げられる *The Canterbury Tales* に収められている 'The Miller's Tale' と、18世紀に Chaucer と同じ母語の話者である3人の翻訳者によって、自分たちと同じ時代を生きる人々にそれを伝えるために書かれた3種類の翻訳である。異言語間における翻訳を対象とした研究であれば、両言語の表現における傾向の違いに着目し、統語的観点からの翻訳技術を追求することも効果的であろうと考えられるが、「現代語訳」を扱う本稿の目的は技術的に優れた翻訳を模索しようとするものではなく、あくまでも原典である 'The Miller's Tale' の中に流れる、文学性の主要な要素のひとつとして多義語の意図的な使用を捉え、翻訳におけるその再現の可能性を考察するものである。その過程において、翻訳者たちは異言語間の翻訳とは異なる難しさ、さらに異言語間の翻訳と同様の難しさを乗り越える試みをしている。本稿では、その中でも特に解釈に工夫の必要な2つの多義語 'hende' と 'sely' に注目した。

'The Miller's Tale' は、若く美しい妻が夫を裏切る話であるが、ここでその概要を簡単にまとめておくことにする。裕福だが年老いた大工の John は最近、若くて美しく、人も羨むような妻 Alison と結婚した。そして分不相応に若く美しい妻を持ったばかりに John はとても嫉妬深くなり、いつも妻の裏切りを心配して暮らしているのだった。また彼らの家には、占星術の得意な賢い大学生 Nicholas が下宿していた。この Nicholas は身のこなしがしなやかで、近所では「お上品な (hende) Nicholas」と呼ばれていた。また彼らの住む教区の教会書記である Absolon はおしゃれで、ダンスや歌の得意な洒落者であったが、この Absolon

は事あるごとに Alison を誘惑しようとして彼女に流し目を送ったり、夜中に家の前でセレナーデを奏でたりしていたが、いつも彼女につれなく断られていた。

John が仕事で出かけたある日のこと、Nicholas が Alison を誘惑し、2 人は John をだまして浮気をするということで合意し、Nicholas は狡猾な計画を立ててそれを実行する。そして Nicholas の作り話を信じ込まされた John が屋根から吊るしたこね桶の中で眠ってしまっている間に、2 人は愛し合うことに成功するのである。

しかしちょうどその時、Alison のことをあきらめきれない Absolon がまた家の前まで歌を歌いにやってきたので、Alison は Absolon をからかおうと思い、窓の隙間からキスするふりをして、くちびるのかわりに自分のお尻を突き出したのである。Absolon は彼女のお尻にキスをさせられたと知ると、怒り狂って復讐を誓う。Absolon は近所で熱く熱した鋤の刃を借りて戻って来ると、Alison に再び誘いのことばをかける。すると今度は Absolon をからかおうとした Nicholas が自分のお尻を突き出して放屁するのだが Absolon が持って来た熱い鋤の刃をお尻に押し付けられ、大火傷を負う。その時に発した Nicholas の悲鳴を聞いて、だまされた John が床に落ち、目を覚まして騒ぎ出す。しかし町の人達の誰一人として John の話を信じる者はなく、結局は Nicholas と Alison の逢い引きが成功に終わる、という話である。また、この物語に関する解釈は、実際に本を手取る読者にゆだねられるべきであると考え、筆者による物語の解釈はここでは差し控えることにする。

Chaucer の ‘The Miller’s Tale’ では、学生の Nicholas と、その家主である大工は物語のさまざまな場面で、それぞれ “hende Nicholas” と “sely carpenter” のように、定型句の形で表現されている。そしてこれらの決まり文句は、異なるさまざまな場面で意図的に繰り返し使われることによって、意味の曖昧性を含んだ Chaucer 流の皮肉表現を構成しているのである。つまり読者は、使われる場面によって “hende” や “sely” の持つ、数多くの意味の中からどの意味を適用するのか、という語の解釈を変えながら読み進めなければならないということである。こうした皮肉表現は、Chaucer の作品の醍醐味とも言えるし、読者に解釈の自由とその楽しさを与えるという点では、その作品を文学たらしめる重要な役割を担っている。しかしこれらの多義表現は大変に翻訳者泣かせなものである。なぜならその語の意味や背後にある含意を、全く同様に含むような等価な語が翻訳の目標言語に見つかるとは限らないからである。そして同じことは現代語訳にもあてはまる。つまり語の意味や含意が時代と共に変化したことにより、原典に使われている語と等価であるとみなされている現代の語が存在していたとしても、必ずしも原典が書かれた当時の意味の範囲と同じであるとは限らないし、皮肉な意味合いを読み取りづらくなっているかもしれないからである。

こうした表現を翻訳するための、可能な打開策としては、逐語的に訳してしまうか、もしくは説明的な表現を付け加えることで言い換えてしまうか、それとも言語化しづらい箇所を単純に無視してしまうか、という対応が思いつく。しかし、どのような方法を採用したとしても、原典の持つ文学性を失ってしまうことに変わりはない。ここでは、実際に “hende”

と“sely”という多義的な語を、翻訳者たちがどのように訳しているのか、ということを見るために、Chaucerの原典と、3種類の1700年代に書かれた翻訳、Samuel Cobb (1712)、John Smith (1713)、an anonymous writer (1791)を比較した。

2. 18世紀の翻訳

中世からルネッサンス期に至るまで、ラテン語をはじめとする古典に使われている言語とは対照的に、話しことばとしての英語は“rude, gross, barbarous, base, vile” (Jones 1953:7)であり、“uneloquent language” (the title of Chapter 1 of Jones (1953))と考えられ、文学作品の媒体としてふさわしいものとして、みなされていなかった。ところがルネッサンス期に入ると、自国のアイデンティティに対する興味が高まり、それにともなって自国の言語である英語への関心も高まるようになった。その結果英語は話しことばとしての地位、ひいては文学作品の媒体としての地位を、だんだんと確立することとなった。また印刷技術の発達によって、状況はさらに大きく変化した。商業としての出版が盛んになり、同時に出版物の読者も増加したのである。そして自国の文学への関心の高まりから、英語で書かれた古典に目を向けたときに、その代表とも言えるChaucerの作品も当時すでになりに読みづらいものとなっていたようである。そのことは、以下のような当時の複数の記述からも伺い知ることができる。(Brewer, ed. 1978: 153,157,206)

Thus time can silence *Chaucers* tongue But not his witte (Edward Foulis, 1635)

時間はChaucerのことは沈黙させることはできても、彼の機知までもを沈黙させることなどできないのだ。(筆者訳)

Old *Chaucer*, like the morning Star,

To us discovers day from far,

His light those Mists and Clouds dissolv'd,

Which our dark Nation long involv'd;

But he descending to the shades,

Darkness again the Age invades. (John Denham 1668)

古き良きChaucerは白む空に見えるような

暁の星のようだ

彼の光は我が国が長いこと包まれていた

あの霧や雲を消し去ったのに

しかし彼は陰に入ろうとしている

暗闇がこの時代に再び広がるのだ(筆者訳)

Such Chaucer was, brighter mirror of his age
Tho’ length of years has quite obscur’d his page:
His stile grown obsolete, his numbers rude,
Scarce read, and but with labour understood. (Astrophil 1740)
Chaucerはその当時の輝かしい鏡であった
それなのに年月が彼のページを全く覆い隠したのだ
その文体は時代遅れになり、その詩脚には洗練を感じられなくなった
ほとんど読まれず、読まれたとしても理解するのは一苦勞なのだ（筆者訳）

そしてその結果、Chaucerをはじめとする英語で書かれた古典の、当時の現代英語への翻訳という活動がなされるようになった。しかし翻訳とは言っても、当時専門家としての翻訳者が多数存在していたというわけではない。*The Idea of the Vernacular: An Anthology of Middle English Literary Theory 1280-1520* (Wogan-Browne et al., eds. 1997) には、そのことに関して以下のような記述がある。

“Authorship in the Middle Ages was more likely to be understood as participation in an intellectually and morally authoritative tradition, within which...a writer might fill one of several roles, copying, modifying, or translating, as well as compiling.”

中世の執筆業はおそらく、知的、道徳的に権威ある伝統への参加であると考えられていた。そのなかで作家は編集する、というだけでなく、書き写す、修正する、翻訳するというようないくつかの役を務めていたのであろう。（筆者訳）

さらに Hopkins and Rogers (2005) は、当時の翻訳者を (1) “canonical poets and novelists” (Dryden や Pope など がこれにあたる) (2) “occasional and full-time translators” (3) “grammarians and petagogues” (4) “translators of erotica and pornography” というように 4 つのグループに分類しているが、これ以外にも、私的なサークル内やごく限られた仲間内での私的な翻訳も相当数行われていたようである。また当時から、複数の翻訳者による翻訳も決して珍しいものではなかった。また、現代考えられているような、原典と翻訳作品との境界線は、当時はあまりはっきりしていなかった。同様に、原作者と翻訳者の区別も、今日に比べて曖昧なものであったようである。

3. 3人の翻訳者

本稿では Chaucer の ‘The Miller’s Tale’ の 3 種類の翻訳を取り上げる。ここでそれぞれ

の翻訳者の略歴を *Oxford Dictionary of National Biography* (2004) に基づいてまとめておく。

Samuel Cobb (1675-1713) は Cambridge の resident school master であった。彼はギリシヤ・ローマをテーマとした数多くの詩を出版し、文学に精通していた。それに加えて彼の 'The Miller's Tale' は大変に成功を収め、11度の再版を重ねた。

John Smith (1662-1717) は Oxford で学び、そこで教師をする傍ら、詩や劇を創作した。

1791年に出版された翻訳の作者に関しては、それを特定できる情報はない。しかし翻訳にかなりの長さの前書きを加えている。この翻訳者の意図がよく現れていると思われる部分を以下に抜粋する。

Indeed the gross indecency of Chaucer's humour, as originally written, is so great a drawback from his sterling merit, that his warmest admirers must confess it to be an insurmountable objection to his being a general favourite, in this age of refinement, even was his language more intelligible than it is, to the world in general. In the point, on which the Miller turns his Tale, it has been my study to soften the original thought, as far as the story, which absolutely depends on it, would admit; and to cloath it in language, the most delicate I could find, to express an event so indelicately singular: (Anonymous 1991[1791]: 169)

実際のところ、原典にあるように Chaucer のユーモアは大変に下品で、それは彼の持つ優れた価値を損なうような大きな障害となっている。優雅さを求められるこの時代において、世間では彼の表現はなおさら不適切であるとされ、心温かい Chaucer ファンでさえも、この下品さが克服できない欠点となって、彼が世間一般に好まれる作家になれないのだと言わざるをえない。粉屋が話を披露したちょうどその時に、許容されうる限りにおいて原典の意図を穏当なものにすること、そして見つけうる限りにおいて最も優美な表現で覆うことで、異常なまでに猥褻な内容を表現することがわたしの目標となった。(筆者訳)

以上のことから、この翻訳者が全体を通して、猥褻な表現を意図的により道徳的な表現に書き直そうとしているということが伺える。事実この翻訳では猥褻な表現や下品な会話が、原典に比べてずっと淡泊に書き換えられている。(猥褻表現を誇張する傾向にある John Smith とは対照的である。) このような特徴から考えても、この作者が女性であるという推測ができるかもしれない。Gillespie and Hopkins, eds. (2005) の 'Women Translators' において、Sarah Annas Brown は当時の女性翻訳者の多くは "there was a lingering prejudice, at least within select bluestocking circles, against women writing for money" 「少なくとも

文芸趣味のインテリな女性たちの間には、生活のためにものを書く女性に対して根強い偏見があった。」(筆者訳) というような理由から、はっきりと自分の名前を出すことを拒みつつも、“many dozens of female translators were writing and publishing during this period [i.e. 1660-1970] and that these female translators are known to “regularly censor of their male authors in the interests of decorum.” 「数多くの女性翻訳者たちは 1660 年から 1970 年の間の時代に作品を書いて出版していた。そしてこのような女性翻訳者たちは『男性作家に対する、礼儀作法の観点からのきちようめんな批評者』として知られている。」(筆者訳) のように述べ、女性作家の存在を明らかにし、翻訳活動に関しても彼女たちの翻訳が “might take place within a group of chosen friends” (Brown 2005: 111,112,113) 「限られた友達グループ内で行われていたのであろう」(筆者訳) であったというように仲間内で翻訳を行う女性の存在や、道徳的に既存の話を書き直す女性作家の存在を認めている。不詳の訳者が女性であった、と断言することはもちろんできないが、その可能性が全くないとは言えない。

ここで、3 人の翻訳者の特徴が色濃く現れていると思われる箇所の一例を挙げておく。場面としては scene 1 で、Alison の形容の一部である。

She was a prymerole, a piggesnye,
For any lord to leggen in his bedde,
3270 Or yet for any good yeman to wedde. (Chaucer 3268-3270)
SHE WAS A PRIMROSE, A PIGSNYE,
FOR ANY LORD TO LAY IN HIS BED,
OR YET FOR ANY GOOD YEOMAN TO MARRY (筆者訳)
彼女はかわいらしく、いとしい人で
君主の誰かが自分のベッドに寝せたり
どこかの小地主が結婚したりするくらいの人なのだ (筆者訳)

She was a *Primrose*, and a *Pigsnye* too.
And fit to lig by any Christian’s Side,
85 Or a Lord’s Mistress, or a Yeoman’s Bride. (Cobb 83-85)
彼女はかわいらしく、またいとしい人だ。
そしてだれかのとなりに横たわったり
君主の奥方や小地主の結婚相手としてぴったりなのだ (筆者訳)

The Charmer was created for Delight.
Form’d to provoke a Monarch’s Appetite,
125 A *Venus* fit to wanton by *Jove*’s Side,

Or yet to make a good convenient *Vulcan's* Bride. (Smith 123-126)

この魅力的な人は喜びのために創られたのだ

君主の欲望をかきたてるように創られているのだ

ジュピターの横にふさわしいみだらなビーナス

そしてウルカヌスにふさわしい配偶者となるように作られたのだ (筆者訳)

Each sturdy yeoman envied John his prize,

80 And courtly knights beheld with amorous eyes. (Anonymous 79-80)

たくましい小地主はみな John の得たものを羨んだ

そして優雅な騎士たちはなまめかしい目をして彼女を見たのだ (筆者訳)

Chaucer のものと対比させて見てみると、Cobb の訳は “*Primrose, and a Pigsnye*” といういとおしさを表す語もそのまま使って、大変忠実に、大部分を逐語的に訳しているのがわかる。反対に Smith は、行数の面から見ても明らかなようにこの箇所を誇張して、大胆にも Alison と地主をローマ神話になぞらえた表現に替えてしまっていて、つまり Alison を Venus に、地主を Vulcan に例えている。Venus は愛と美の女神として良く知られているし、Vulcan は火の神であると同時に、鍛冶職人であり、鍛冶屋のニックネームにも使われる。さらに、Vulcan は Venus の夫であり、Venus を Mars に取られてしまうことから、妻に浮気される夫の守護神と言われている。このような比喩から、Venus は美しいけれども不誠実な Alison に重なるし、Vulcan はちからやお金を持っているけれども妻に裏切られてしまう大工に重ね合わせることができる。そして Mars はもちろん Nicholas と解釈することができる。これらの登場人物の相関関係を図にまとめると以下のようなになる。

Smith の翻訳におけるローマ神話を使った比喩

	(支配者) (権力・財力)			(美・不誠実)			(妻を夫から奪う)	
ローマ神話:	Jove	Vulcan	--- 婚姻 ---	Venus	---♥---		Mars	
登場人物:	Monarch	John	--- 婚姻 ---	Alison	---♥---		Nicholas	

このように考えると、Smith のものは確かに巧みなたとえであるということは認めても、Chaucer の原典からは大きく逸脱しているという印象は否めない。訳者不詳のものは Chaucer の文面と比較すると、原典では地主が自分のベッドのわきに置く、という比較的明確な性的表現をとっているところを、騎士が思慕の情を持った視線を送る、というように、原典に比べてかなりマイルドな表現に変えられていることがわかる。

4. “Hende Nicholas”

Chaucer は ‘The Miller’s Tale’ の中で Nicholas のことを頻繁に “hende” と描写している。このような語のつながりは Cooper (1980:1) のことばを借りれば “idiomatic irony” と言することができる。形容詞 “hende” の中心的な意味は “courteous, polite, gentle” (Chaucer Glossary 1979:73) であり、この語は物語の中ではほとんどいつも、皮肉的に使用されている。つまり、Nicholas の態度は表面上は “hende” であるが、心の中では彼は不道徳でふしだらなことばかりを考えている、といったことである。Beichner (1960) によれば、“hende” はほめことばとしての定型句を構成し、Chaucer もその意味でこの語を使っている。そしてこの語が物語全体のキーワードとなり、この語の多義性から来る曖昧性こそが、この物語を興味深いものとするところなのである。そのことは Cooper (1980:2) も “there is a close, though not identical, connection between irony and polysemy.” 「皮肉と多義性の間には、近いけれども同一ではない、というような関係がある。」(筆者訳) と述べている通りである。

“hende” の最も基本的な意味は Beichner (1960) に従うと、“near, at hand” である。Nicholas は Alison と 1 つ屋根の下に住んでいるわけだから、物理的に常に Alison のそばに存在していることとなり、このことは Nicholas にとっては後に大きな強みとなるのである。このような意味が表面に出てきていると思われる箇所として具体的には Alison の夫が家を離れている隙の出来事で、“That on a day this hende Nicholas / Fil with this yonge wyf to rage and pleye” (3272-3273) (THAT ON A DAY THIS GENTLE NICHOLAS / FALL INTO A CONDITION WITH THIS YOUNG WIFE TO SPORT SEXUALY AND PLAY) (筆者訳)「お上品な Nicholas は、この若妻と戯れて遊ぶというようなことになる」(筆者訳) という部分がある。実際この物理的な近さに関しては物語中でも Chaucer は “Men seyn right thus: “Alwey the nye slye / Maketh the ferre leeve to be looth” (3392-3393) (MEN SAY RIGHT THUS: “ALWAYS THE NEAR SLY / MAKES THE FAR DEAR TO BE HATEFUL) (筆者訳)「人はちょうどこのように言うものだ『いつも、身近にいる巧妙な人が、より遠い場所の恋人を嫌いな人にしてしまう』」(筆者訳) と述べているほどである。

“hende” の 2 つ目の意味は “ready or skilful with the hand, dexterous” (Beichner 1960:125) である。Nicholas は Absolon とは異なり、“Do wey youre handes, for youre curteisye!” (3287) (PUT AWAY YOUR HANDS, IF YOU PLEASE!) (筆者訳)「お願いだから手をどけてください!」(筆者訳) や “Whan Nicholas had doon thus everideel / And thakked hire aboute the lendes weel” (3303-3304) (WHEN NICHOLAS HAD DONE THUS COMPLETELY / AND PATTED HER AROUND THE LOINS WELL) (筆者訳)「Nicholas はこのように完全にしようとして彼女の腰のまわりを上手に軽くたたき」(筆者訳) とあるように、実際に手を使って身体的に Alison に求愛する。またそれに加えて、彼は恋愛において、女性を巧みに扱うことに長けているとも言える。

“hende” の 3 つ目の意味は “pleasant, gentle, courteous” (Beichner 1960:126) である。

Nicholas は “lyk a mayden meke” (3202) (LIKE A MAIDEN MEEK) (筆者訳)「乙女のように柔和」(筆者訳)であり、物腰が柔らかく、まさに “gentle” である。そして “And spak so faire, and profred him so faste” (3289) (AND SPOKE SO ELEGANTLY, AND PROFFERED HIM SO EAGERLY) (筆者訳)「とても上品に話し、大変熱心に求愛したので」(筆者訳)という行からも分かるように、彼はまた “courteous” であるとも言える。

“hende” の4つ目の意味は “expert, skilful, clever” (Beichner 1960:126) である。このような Nicholas の性質は、大工をだまそうと画策して、その計画を完全な形で実行するという点で、この物語の中においての重要なポイントとなる。突拍子もないような作り話を、もっともらしい顔をして語って聞かせて、いとも簡単に大工をだましてしまう様子が、“And atte laste this hende Nicholas / Gan for to sik soore, and seyde, “Allas!” (3487-3488) (AND AT LAST THIS GENTLE NICHOLAS / WENT TO SIGH SORELY, AND SAID, “ALLAS!” (筆者訳)「そしてとうとうお上品な Nicholas は痛ましくため息をついて言った『ああ!』」(筆者訳)や、““Why, yis, for Gode,” quod hende Nicholas,” (3526) (“OH, YES, FOR GOD”, SAID GENTLE NICHOLAS) (筆者訳)「『ああ、そうです、神にかけて』と Nicholas は言った」(筆者訳)のような表現からもうかがえる。Nicholas は “skilful” に作り話をし、計画を実行したわけである。

“hende” の5つ目の意味は “pleasing to the sight, comely, fair, “nice”” (Beichner 1960:127) である。Chaucer は話の中で、Nicholas がどのような容姿をしていたのか、具体的に語っているわけではないが、それでもなお、若くて美しい Alison が、洒落者の Absolon でも、大工で裕福な夫でもなく、彼のことを好きになった、ということは紛れもない事実であり、物語中にも “She loveth so this hende Nicholas” (3386) (SHE LOVES SO THIS GENTLE NICHOLAS) (筆者訳)「彼女はこんなにもお上品な Nicholas を愛していた」(筆者訳)という記述がある。このことから、彼が容姿端麗であった、ということは想像に難くない。以上挙げてきた5つの “hende” の意味を簡単にまとめると以下のようなになる。

- (1) near at hand: Alison と同じ屋根の下に住み、いつも近くにいる存在である。
- (2) ready or skilful with the hand, dexterous: 手先が器用である。
- (3) pleasant, gentle, courteous: 乙女のような顔立ちで柔和で、物腰がやわらかい。
- (4) expert, skilful, clever: 巧みにずる賢い作り話をして、大工を上手くだます。
- (5) pleasing to the sight, comely, fair, nice: はっきりとした顔立ちの記述はないが、Alison が愛するくらい美しいと考えられる。

“hende” を訳すのに、Smith は “gentle” という辞書的には等価であるとみなされている逐語的な訳語を使用しているが、そうすることによって “hende” の意味の一部を表すことはできるので、良い意味での形容詞を使うことによって、それとは正反対の意味合いを同

時に響かせる、という Chaucer と同じような皮肉的な感じを出すことには成功しているが、他に含意されている込み入った複数の意味がなおざりにされてしまうことになる。しかし Smith は現代語訳全体を通して “gentle” (34, 128, 161, 297, 322, 399, 478, 582) を 8 回も使用している（必ずしも逐語的に Chaucer が “hende” を使用している箇所が出てくるわけではない）ので、その意味では Chaucer と同様に、人物に対する定型句を構成していることになり、原典の持つ 1 つの文学的な特徴を保持していることになる。もちろん “gentle” という 1 語で “hende” の意味の全てを言語化できているわけではないが、このことから、Smith が原典と同じような常套表現を構成し、文学性を保持しようと試みていたことが伺える。このような表現を用いて Smith は登場人物のイメージの単純化を計ることにより、学者層だけでなく、当時の一般読者にも広く読み物として受け入れられやすくしようとしていたのではないかと考えられる。それに対して Cobb は “designing” (108) や “gentle” (310)、“good” (283, 501)、“subtle” (17, 241) というような形容詞を使っているが、定型語句を構成しているわけではない。さらに “designing” (108) や “subtle” (17, 241) を使うことにより、読者に表現の持つ表の意味と、そこから生まれる裏の意味の解釈の余地を与えず、ある 1 つの（翻訳者の）解釈を読者に押し付けてしまうことになる。また、Cobb は定型語句で表しきれない原典の持つ皮肉を、“This learned Clerk had got a mighty Fame For Modesty, and Nicholas his Name” (15-16)「この博学な学生は、その上品さゆえにとっても評判で、名を Nicholas と言った」（筆者訳）というような表現を付け加える工夫をして表現しようとしている。訳者不詳の作品中では、“crafty” (389, 611) や “cunning” (309)、“honest” (236) という形容詞が使用されている。Nicholas は文字通り嘘をついて大工をだますわけだから “honest” (236) とはほど遠い。よってこれは原典に近い皮肉表現と言えるが、“crafty” (389, 611) や “cunning” (309) の場合は Cobb 同様、皮肉な感じが消えて、翻訳者の解釈を読者はそのまま受け取ることになってしまう。Cobb や不詳の訳者のものは、1 つの語を繰り返し使う定型語句がもたらす文学的効果を再現できていないし、Smith のように定型語句を形成したとしても、“hende” と “gentle” の意味範囲の違いから、Chaucer の意図したような効果を再現するのは難しかったと言える。

原典 3272 行目の “hende” は、この作品の中でも最も猥褻な場面のひとつで使用されている例である。そして、ここでは Nicholas は夫である大工の留守中に妻の Alison を誘惑しているので、文字通りに受け取れば “near at hand” や “ready or skilful with the hand, dexterous” “expert, skilful, clever” “pleasing to the sight, comely, fair, nice” というような意味を適用できるがしかし、同時に “gentle, courteous” の意味が響いてくると、場面の性質上痛烈な皮肉にも受け取ることが可能になる。Smith はこの場面の皮肉的な意味をくみ取って、同じ場面の Nicholas を “this Gentle Nicholas” (128) と表現している。ところが Cobb はここでは彼のことを “Wag” (88) (“Any one ludicrously mischievous; a merry droll.” (OED 2)) と表現しており、これでは彼の性格を直接的に言い表すことになるので、

Chaucer の原典の持つ皮肉な感じが消されてしまう結果になる。訳者不詳の作品中のこの場面においては、Nicholas の性格を表すような形容語句は使用されていないので、やはり皮肉な感じを読者が抱くことはできない。

次に、訳者間の解釈の違いが表現に顕著に現れている例を挙げる。大工に洪水から身を守る方法を教える場面においての Nicholas を原典では “Hende Nicholas” (3526) と、ここでもやはり定型語句を使用した表現になっている。ここでの Nicholas は、John の視点から見れば、“gentle”の意味で「親切にも」自分に洪水から助かる方法を教えてくれた存在であるが、同時に我々読者の立場からすれば、彼は “clever” の意味で「狡猾にも」自分のいい加減な作り話をうまく John に信じ込ませることができる人間であった。Chaucer の表現であれば、“hende” の一語でこのどちらの視点から見た意味も表現することができ、また一語で表現できるからこそ生まれることばのおもしろさを味わうことができる。ところが同じ場面のそれぞれの現代語訳を見比べてみると、Smith は「親切な」方の意味を取り上げて “Gentle Nicholas” (478) と訳していて、この表現からは、John の視点に重点を置いた、皮肉の意味が加わっている。一方他の2つの翻訳では「狡猾な」方の側面を強調し、Cobb は “designing Clerk” (377) と、不詳の翻訳者も “cunning clerk” (309) と訳しているが、これらの表現は直接的かつ説明的なので、読者は Chaucer の皮肉を翻訳を通して感じることはできなくなっている。

5. “Sely Carpenter”

形容詞 “sely” は “hende” が Nicholas に対して使われていたのと全く同様に、大工である John を描写するときの決まり文句のように使用されている。“sely” は古英語の時代には “happy” や “prosperous” “fortunate” “lucky” (Cooper 1980:2) などの意味を持ち、これらの意味で15世紀まで使用されていた。それから次第に意味が変化し、神に特別に守られた幸せな人物、または幸運な人物を表すようになっていった。このような宗教的な含意が加わったことによってさらに、“pious,” “holy,” “innocent” などのような意味で使われるようになった。これらの意味は “helpless or defenceless against their enemies in this fallen world” (Cooper 1980:2) というような性質を持つ殉教者と関連したものであった。上記のような “helplessness” “defenselessness” という性質は、いつもではないにしても、容易に “pitiable” と考えられ、そして13世紀には “pitiable” であることは “simplicity” や “innocence” が原因の短所と考えられるようになった。15世紀になると、この軽蔑的な意味合いがさらに色濃くなる。Chaucer の時代には “sely” の “pitiable” や “religious” な含みが、軽蔑的な含みと両方共存していた。そして Cooper (1980:5) の “Chaucer is fully aware of the meanings of “sely” —meanings that can imply very different attitudes, depending upon the context in which the adjective is used.” 「Chaucer は “sely” の複数の意味を完全に意識

している一つまりこの形容詞が使われる文脈によって多彩に変化するさまざまな態度を含意できる複数の意味のことである。」(筆者訳) というような記述からも分かる通り、“sely”の意味の曖昧性を最大限に活用することで、何も知らないような顔をして皮肉的な響きを表現に付加させていたのである。語の曖昧性を利用した皮肉表現が Chaucer の真骨頂であり、文学の楽しみであるのだが、Steiner (1975:16) も “Fine writing has a tenuous life in both languages; and to maintain it in translation, anything finally may be sacrificed” 「優れた書き物はどちらの言語においても薄命である。そしてその魅力を翻訳中に維持しようとするとなんかが結局は犠牲になってしまうであろう。」(筆者訳) というように述べている通り、それを翻訳に反映させるのは大変に難しいことである。本稿で考察している3人の翻訳者たちもそれぞれ、Chaucer 流の曖昧表現を何とか保持しようと試みてはいるが、そこにはやはり翻訳の限界が存在する。興味深いことに、Chaucer はこの “sely” を、Nicholas が John に対して悪だくみを働く場面にしか用いていない。具体的には 3404、3423、3509、3601、3614 行の5箇所である。

“sely” が Chaucer の原典で最初に使われているのは 3404 行目の “This sely jealous housbeonde” (THIS FOOL JEALOUS HUSBAND) (筆者訳) 「この馬鹿で嫉妬深い夫」(筆者訳) である。Cooper (1980:6) によれば、“jealousy is a traditional *fabliau* characteristic of the husband who is to be deceived.” 「嫉妬は、妻に裏切られる夫の伝統的なファブリオ的性質」(筆者訳) であり、大工はこの先、Nicholas と Alison にだまされることになるので、この箇所の “sely” には “pitiable” という意味を読み込むことができる。しかしそこでも、哀れみと軽蔑が入り混じったものが含意されている。

さらに大工は、“A riche gnof” (3188) (A RICH CHURL) (筆者訳) 「裕福な百姓」(筆者訳) という表現からも分かるとおりの裕福でしかも人も羨むほどの若くて美人の妻を娶ったという意味では “lucky” で “fortunate” だと言える。大工の裕福で恵まれた状況を、各翻訳者とも多少強調した形で “heap’d up many a Hoard,” (C-version 3) 「多くの蓄えを貯めこんでいた」(筆者訳)、“tho’ with Riches he was amply stor’d,” (S-version 3) 「彼は富をたっぷり蓄えていた」(筆者訳)、and “A carpenter, whose coffers teem’d with gold;” (A-version 2) 「金庫はお金でいっぱいの大工」(筆者訳) と表現している。しかし実際には、彼は常にかわいい妻の浮気を心配していつも嫉妬に悩まされ、それだけでも “lucky” や “fortunate” という状況からはほど遠いし、最後には愛する妻を寝取られるという不幸に見舞われる。つまり先にも述べたとおり、大工のこの物語中での役割は “a typical *fabliau* cuckold, a rich old man who, against all good sense, has recently married a young woman whose sexual appetites are bound to be the greater given the differences in age between husband and wife.” (Cooper 1980:7) 「あらゆる良識に反して、夫婦の年齢差のために当然に性的魅力を備えているような若い女性と先ごろ結婚した、というような典型的なそしてファブリオ的な妻に裏切られる裕福な老人」(筆者訳) なのである。

Chaucer はまた、夫と妻の年齢の差について、“Men sholde wedden after hire estaat, / For youthe and elde is often at debaat” (3229-3230) (MEN SHOULD MARRY HIS PERSONLIKE HIMSELF, / FOR YOUTH AND OLD IS OFTEN AT QUARREL) (筆者訳) 「人は自分の社会的立場に従って結婚すべきだ / なぜなら若者と老人はすぐに言い合いになるからだ」(筆者訳) と述べている。等価の内容のことを Cobb は “For Youth can never be a Rhyme to Age” (52) 「なぜなら若者は決して老人とは韻を踏んで意見が一致しないものだからだ」(筆者訳) と表現し、さらに “Hence Jealousies create a Nuptial War, / And the warm Seasons with the frigid jar” (51-52) 「なぜなら嫉妬は夫婦喧嘩を生み、 / そして心温まる季節にも冷ややかな不和を生むからだ」(筆者訳) という修辭的な行を付け加えている。Smith も Cobb と同様に独自の行 “His chilling Snow but ill requites her Flame” (80) 「彼の冷え冷えするような雪は彼女の情熱に不十分な形でしか応えられない」(筆者訳) を加えている。さらに73行目の “all Cuckolds sprung from Heat and Cold” 「あたたかいところから冷たいところへと飛ばされてしまう、妻に裏切られるあらゆる夫」(筆者訳) も考え合わせると、やはり年老いた者と若者との対比を表す対句表現を構成していることがわかる。

John	OLD	cold (73)	snow (80)
Alison	YOUNG	heat (73)	flame (83)

80行目の “flame” という語は、Spears (1981:144) によれば、婉曲的に “lust; sexual passion” を表すことがあり、“flame” と近いものと考えられる “fire” もやはり、“sexuality” や “erotic life” を表す。それとは反対に、“snow” は “impotence” を象徴しうる。(Vries 1976:430) このような、多少冒険的な解釈は、この行に続いてすぐに Smith が書き加えている “And think that She from Others will receive / The Love He cannot, and which They can give.” (83-84) 「そして彼は与えられないのに、他の者なら与えられる愛を、彼女が他の者から受けるのです」(筆者訳) という表現に支持されると考えられる。つまり、“The Love He cannot, and which They can give” というのは、単に愛する気持ちという精神的なものだけではなく、身体的な愛情表現という解釈が可能になるのである。これまで見てきたように、Smith は John と Alison の歳の差を、独自の表現を付け加えることによって、より鮮明に読者に印象付けようとしていることがわかる。また、原典3225行目では、大工は自分が妻を寝取られるのではないかと妄想している。(ただし原典のこの段階では、大工は何の確証もないのに Alison の浮気を心配しているので、「妄想」としたが、実際に後の段階になると彼の心配が現実のものとなってしまう。) このような妄想をしていることから、大工がいかに自分に自信を持てずにいるか、ということを伺い知ることができる。このような彼の妄想を、Cobb は “And oft was seen to rub his aking Brows.” (46) 「そしてよく、彼が痛む額をこすっているのが目撃された」(筆者訳) と表現していて、さらに訳者不詳のものは “And shook ideal antlers on his brow” (52) 「そして額の上の架空の角を振った」(筆者訳)

と表現されていて、さらに、この2つの表現が非常に似ているということも注目に値する点である。一方 Smith は、等価と思われる箇所を “And thought all Cuckolds sprung from Heat and Cold,” (73) というように訳してはいるが、これは自分の妻を寝取られるという大工の勝手な想像ではなく、一般論としての記述となっている。このような大工の自信の無さから、形容詞 “sely” は ““trifling,” “feeble,” or “insignificant”” (Cooper 1980:7) と解釈することが可能になる。この “feelbeness” は1つには、精神的な弱さであり、つまり、John が Alison を惹きつけるために十分な自身を持っていないということを意味する。もう1つは身体的な弱さ、つまり John が妻の Alison を満足させる肉体的な能力を十分に備えていない、ということを意味している。この2つの意味は互いに絡み合っているが、原典では2つ目の意味は、はっきりと言語化されてはいない。しかしそれに対して、Cobb も Smith も婉曲表現を使って John の身体的な弱さについて言及している。(さらに訳者不詳の作品においても、“the poor feeble bridegroom” (49) という言及がある。)

大工のもう1つの特徴として、話全体を通して繰り返し何度も神や聖人のことを引き合いに出している、ということが挙げられる。このことから、原典3509行目や3601行目の “sely” は ““pious,” “holy,” and “spiritually blessed, enjoying the blessing of God”” (Cooper 1980:8) と解釈することが可能になると考えられる。John は、Nicholas が自室に閉じこもってしまった時に、自分がまさに “helpless” な状況にあると感じて、神や聖人に救いを求めるのである。彼のこうした敬虔さや信心深さは、この物語の中で非常に重要な役割を果たしている。言い換えると、この大工の信心深さがあったおかげで、Nicholas は作り話の “Goddess pryvetee” (3558) をいとも簡単に大工に信じ込ませることができたのである。それに加えて “Axe nat why, for though thou aske me, / I wol nat tellen Goddess pryvetee.” (3557-3558) (ASK NOT WHY, FOR THOUGH YOU ASK ME, / I WILL NOT TELL GOD’S SECRET.) (筆者訳)「なぜかは聞かないでください。なぜならあなたがわたしに尋ねても / わたしは神の秘密を言うつもりはないのですから」(筆者訳) という Nicholas の発言は (Chaucer 流の) 皮肉たっぷりの表現である。つまりここで言う “pryvetee” (1. secrecy 2. secrets, private affairs *Chaucer Glossary* 1979:114) とは神の秘密などではなく、実際は Nicholas 自身の秘密の悪巧みのことを心に描きながら発話しているからである。原典においては John が神や聖人を言及している箇所は 3425 行目 “Seint Thomas”、3427 行目 “God”、3449 行目 “Seinte Frydeswyde”、3461 行目 “Seint Thomas”、3464 行目 “Jhesus, hevene kyng!”、3483 行目 “Jhesu Crist” and “Seinte Benedight”、3486 行目 “Seinte Petres soster”、3508 行目 “Crist”、and 3512 行目 “hym that harwed helle” に見受けられる。しかし Cobb はそれらを4箇所での言及にとどめている。(271, 292, 295, 309) 同じく Smith も4箇所、(330, 331, 372, 429) 訳者不詳のものも5箇所 (210, 212, 233, 246, 289) となっており、いずれの現代語訳においても John の信心深さはトーンダウンされていると言える。

また別の John の性質としては、“simplicity” や “innocence” ということがあり、これ

にもまた “sely” が適用できる意味である。まず第一に、大工である John が Nicholas ほどの高等教育を受けてはいなかった、ということは明らかである。彼が “innocence” であったということの1つ目の証拠としては、彼があまりにも盲目的に Nicholas のいい加減な作り話を信じてしまった、という点が挙げられる。正確には、ノアの伝説の洪水は創世記には約一年続いたとあるのに、Nicholas はこれから襲ってくるであろう作り話の洪水を “That half so greet was nevere Noes flood” (3518) (THAT HALF SO GREAT WAS NEVER NOAH’S FLOOD) (筆者訳)「ノアの洪水でもその半分にもならないくらいすごかった」(筆者訳)と表現し、さらに “The water shal aslake and goon away / About pryme upon the nexte day.” (3553-3554) (THE WATER SHALL SLACKEN AND GO AWAY / ABOUT 9 A.M. UPON THE NEXT DAY) (筆者訳)「水は次の日の朝9時ごろには弱まって引いてゆくだろう。」(筆者訳)と続けているのである。これはつまり Nicholas の話では洪水はたった1日しか続かないということになる。しかし大工はこれに対して疑問を抱くことも無く Nicholas の話を鵜呑みにしているので、このことで、大工にノア伝説の知識があまり無かったということが暗に示されているわけである。このような状況は3つの現代語訳においてもかなり似た形で訳されている。(cf. lines 470, 499-500 in the C-version, lines 365, 405-406, in the S-version, and lines 300, 331-332 in the A-version) もう1つ John の無知がはっきりと表れている箇所は3818行目の “And thoughte, “Allas, now comth Nowelis flood!”” (AND THOUGHT, “ALLAS, NOW COMES NOWELIS FLOOD”) (筆者訳)「『ああ、クリスマスの洪水が来た!』と思った」(筆者訳)という John の発話である。“Nowelis flood” という句は Noah’s flood と言うところを、言い間違えている明らかな語の誤用である。原典ではこの誤用がさりげなく入っているだけで、Chaucer はここではっきりと、この一種のこぼ遊びを読者に意識させようとはしていないが、このような皮肉的なこぼ遊びこそ Chaucer の魅力であると思われるのである。しかし現代語訳を対照させてみると、Cobb は “Alas! thought he, now comes the fatal Hour, / And from the Clouds does Noah’s Deluge pour.” (688-689)「『ああ、運命を決する時がやってきた、そしてノアの大洪水が雲から降ってくるのだ』と思った」(筆者訳)とし、Smith は “Now comes the Flood, thought he” (778)「今こそ洪水が来るのだと彼は思った」(筆者訳)訳者不詳の作品中では ““Ah now,” thought he, is fall’n this dreadful rain!”” (582)「『ああ、今からおそろしい雨が降るんだ』と思った」(筆者訳)となっていて、共通して語の誤用を言語化してはいない。しかし3人の訳者共、John の無知であるという性質を意識していないというわけではなく、別な形で表現している。具体的には Cobb は “silly” (369, 469)、and “simple” (497) と大工のことを形容し、Smith は “Sot” (70)、“unlearn’d” (74)、“Logwood” (180)、and “Noddy” (180) という表現を使用している。訳者不詳の作品の中でも “silly” (207) という語が使われている。

“sely” で表される最後の John の性質は、気の弱さという意味での “feelbeness” である。Nicholas は John に洪水を生き延びる方法を教えていて、さらに John は Nicholas の

話を信用しているわけだから、本来ならば Nicholas の言うとおりに準備さえしてしまえば何も恐れる必要はないはずである。しかしそれでもなお大工は “that he may see / Noees flood come waywyng as the see / To drenchen Alisoun, his hony deere.” (3615-3617) (THAT HE MAY SEE / NOAH’S FLOOD COME WALLOW AS THE SEA / TO DRAWN ALISON, HIS HONEY DEAR.) (筆者訳) 「ノアの洪水が自分のかわいい Alison を溺れさせるために海を押し寄せてやって来るのが見える」(筆者訳) と、ここでも大げさな妄想を繰り広げ、身もやつれんばかりになっている。このような不必要な恐れは Cooper (1980:10) によれば、“evidence of a feebleness of spirit which, again, may be implied by “sely”” “sely” という語が含意するであろう精神的な弱さを示す証拠」(筆者訳) と捉えることができる。さらに、このように John が心配と恐怖で精神的な疲労を負う、ということは後の話の筋にも関連するような、重要な伏線であると考えられる。つまり洪水が来るはずの夜に、John、Nicholas、Alison の 3 人それぞれがこね桶に入って身を潜めているのだが、その時に、John はこね桶などの準備から来る身体的疲労と、極度の心配から来る精神的疲労との両方から、間もなく寝入ってしまう。そのことは Chaucer も “The dede sleep, for wery bisynesse, / Fil on this carpenter right,” (3643-3645) (THE DEAD SLEEP, FOR WEARY TASK, / FELL ON HIS CARPENTER RIGHT,) (筆者訳) 「骨折り仕事のせいで死んだような眠りがすぐにこの大工にふりかかった」(筆者訳) と肉体的疲労について言及し、さらに “For travaille of his goost he groneth soore,” (3646) (FOR MENTAL ANGUISH OF HIS SPIRIT HE GROAN SORELY) (筆者訳) 「精神の苦しみによって彼はひどくうめいて」(筆者訳) と描写している。こね桶の中という、決して寝心地が良いとは言えない環境でも、このように John がすぐに眠りに落ち、さらに熟睡していたからこそ Nicholas と Alison は邪魔をされずに逢い引きの計画を実行に移せたわけである。以上挙げてきた “sely” の意味をまとめると、以下ようになる。

- (1) pitiable: 妻を寝取られてしまうあわれな夫となる。
- (2) lucky and fortunate: 大工であるが、裕福であり、さらに人も羨む若くて美しい妻をめぐった。
- (3) trifling, feeble, insignificant: いつも妻の浮気を心配し、自分に自信が持てないという精神的な弱さがある。また、妻を満足させることができず、身体的な弱さがある。また、救済策を聞いてもなお、洪水を恐れおののく様子にも、精神的な弱さがある。
- (4) pious, holy, spiritually blessed, enjoying the blessing of God: 信心深さは、随所に出てくる彼の唱える祈りからも伺えるし、彼が信心深く神の怒りの話を信じなければ、この話は成立しない。
- (5) simplicity, innocence: 大学に通い、学のある Nicholas に比べて知力も低いし、突拍子もない Nicholas の話を盲目的に信じてしまうほど愚かである。

“sely”に関しては、3つの現代語訳どれもが定型語句を構成していない。まず、“simplicity”や“innocence”の意味で辞書的な逐語訳としての“silly”という語を Cobb は369行目と469行目の2回、不詳の訳者は207行目で1回使っているのみで、Smith は“silly”を使用していない。その代わりに彼は70行目で“sot”という名詞を使っている、加えて Cobb は244行目に“addle-pated”という形容詞句や“simple”(497)を使用している。また、“pitiable”の意味では3つの作品全てにおいて“poor”という語が使用されている。(C-version: 44, 503, 699 S-version: 786 A-version: 49) John はけちでお金を貯め込んでいたのは、原典も3種類の翻訳においても同様の状況なので、ここでの“poor”は日本語の「貧しい」という意味ではなく、「かわいそうな」と解釈される。“feelbeness”の意味では、唯一訳者不詳の作品中49行目で“feeble”という語が John の身体的な弱さを表すために使用されているだけである。精神的な意味での彼の“feelbeness”をほのめかすような語は、どの現代語訳にも表現されていない。このようなことから、前章までにみてきたような幅広い意味を文脈を変えるだけでたった1つの語で表現するということは、現代はもちろんのこと、18世紀当ても不可能であり、これこそが翻訳者の前に立ちはだかる「翻訳の壁」と考えられる。Nicholas が自分の部屋に閉じこもってしまうと、John は心から彼のことを心配するが、その時の John を Chaucer は“sely carpenter”(3423)と言語化している。この場面の John を Smith は“good old Carpenter”(327)と表しているが、この“good”は2通りの解釈が可能である。1つ目の“good”の意味として“Kind, benevolent; gentle, gracious; friendly, favourable” can be applied to the word “good” (OED 7)『『親切、慈悲深い; 優しい、親切; 友好的、好意的』という意味が適用できる』(筆者訳)を適用することが可能である。つまり、これから自分がだまされるとは知らずに、Nicholas のことを心の底から心配するほど John は“good”な人物である。もう1つは皮肉の意味で、彼は『親切にも』Alison のことばを信じ、『親切にも』彼らの悪巧みを実行させてしまうという解釈である。その意味では“good”の“In mildly depreciative sense implying weakness or trustful simplicity” (OED 7.c.)「弱さや人を信用しやすいということを含意し、少し見下す意味」(筆者訳)という定義を適用することができる。加えて Smith は329行目で“Then wisely shook his Noddle sage, and said,”「そしてわかったふうに賢人ぶった頭を振って言った」(筆者訳)と、John の全てわかったような態度を表現しているが、John が賢くないことは、はっきりしていると共に、だまされることにも全然気づいていないので、この行も皮肉的であると解釈できる。Cobb は単純に“This Carpenter”(268)とだけしていて、訳者不詳のものの中では“silly carpenter”(208)としている。“silly”は逐語的な訳語であるけれども、これまで見てきたように、“silly carpenter”という表現から“sely carpenter”によって Chaucer が意図した意味の全てを読者が受け取ることができるということは疑わしい。

6. おわりに

Chaucer は ‘The Miller’s Tale’ の中で、さまざまな方法で皮肉を表現している。まず、物語全体で表現されているのは、上流社会の宮廷愛に対する皮肉でありパロディーである。それが顕著に現れているのが、Alison へのもう一人の求愛者である Absolon の人物設定である。Absolon については、大工や Nicholas とは異なり、彼を表す特定の決まり文句のようなものが存在するわけではないが、その代わりに、都会的で、歌や踊りがうまく、おしゃれで、一見すると courtly-love のヒーローのように描かれている。Chaucer の原典においても、3種類の翻訳においても、彼の着衣に関してかなり詳細な記述が認められるし、歌や踊りに関しては、固有名詞を挙げるなどして現実味を高めている。(ただし踊りの様式や歌などの固有名詞に関しては、時代とともに流行り廃りがあるので、それぞれの翻訳者は自分の翻訳当時に有名であったものに変えて訳している。) また、既婚の美しい女性である Alison に恋をして、夜な夜な彼女の部屋の外に出かけて行ってはセレナーデを歌う、という場面は、まさに宮廷愛そのものである。それにもかかわらず、結局はばかにされて宮廷愛のパロディーにされてしまうのは、この物語が宮廷愛の伝統的な典型である ‘The Knight’s Tale’ の直後に掲載されている点を考え合わせても、Chaucer の皮肉を感じさせる点であると言える。

また、人物設定に関する皮肉としてさらに考えられるのが、唯一の女性の登場人物である Alison である。Alison に対して使われている形容表現を調べてみると、Chaucer は彼女の外見的な美しさを表す表現を数多く用いていることは統計の上からも明らかである。しかしその反面、考えや性格などといった彼女の内面を表すような表現をほとんど使っていない。翻訳を見てみると、Smith は wanton (92,818) や faithless (543,708) などのような語を使っているが、やはり他の登場人物に比べると、内面を表す形容語句は格段に少なくなっている。Cobb は皮肉的に modest (111,132) を使ったり、また Smith 同様 wanton (241) という語を使用しているが、Smith と同じようにごく少数である。Anonymous の作品中においても wily (198) や wicked (501) といったような語の使用が認められるのだが、他の2人同様、その数は少ない。Alison は花や子ヤギにたとえられるほどかわいらしくても、そのかわいらしい容姿とはうらはらに、結局は夫を裏切って浮気してしまうことから、容姿が美しく描かれれば描かれるほど、彼女の夫に対する裏切りや Absolon へのひどい仕打ちの意地悪さが引き立ってくる。この点もまた、考察に値する Chaucer 流の皮肉の一種であると考えられる。

Chaucer がこの作品を通して表現している皮肉の中でも特に、本稿で取り上げた2つの語に代表されるような、語の意味の曖昧さを巧みに利用した Chaucer 流の皮肉は、翻訳者にとって、最も大きな壁の1つと言っても過言ではない。なぜなら Chaucer 特有の多義語による皮肉表現は、多くの場合、翻訳目標言語内に等価の語を見つけることはできないので、翻訳者に何らかの工夫が求められるからである。そしてこの話の中では、これまで考察してきた “hende” と “sely” という2つの語が大変効果的に使用されている。文脈によっては

これらの語の意味がはっきりと絞れることもあるが、多くの場合にはそれぞれの語の持つ、(時には相反するような)2つかそれ以上の意味が織り交ざっている。しかしどの意味を適用するのか、ということが文脈によって異なってくるので、同一の語であっても、ある箇所においての多義構造が他の文脈内においても等しく適用できるわけではない。従って単純な逐語訳は機能しないのである。

これまで、Chaucer と 3 種類の 18 世紀当時の現代語訳を比較考察してきた通り、それぞれの翻訳者が何とかして原典を訳そうと試みているけれども、作品そのものの持つ文学性をそのまま維持することは、どのような工夫をもってしても難しいと言える。そうではなく多くの場面では、複数ある意味のうちから、その場に最もあてはまると思われる 1 つの意味を翻訳者が決定し、その意味が言語化される、ということが起こっている。その場合、ほとんどの場面では皮肉的な裏の意味ではなく、表面的な意味が翻訳表現となって現れる。その上、言語化できなかった他の意味を表す工夫として、説明的な句や節を翻訳者の独断で挿入している箇所も複数認められるが、どの翻訳をとってみても原典の、一語で表現するからこそ生まれる多義性と皮肉、それに伴う解釈の自由と楽しさ、というような文学性を完全な形で翻訳中に維持するのはかなり難しいと言える。さらに翻訳作品にしか接していない読者にとっては、語の多義性による皮肉の存在すらも伝わらないという結果になってしまう。しかし本来は、このような点こそがこの作品を味わい深くしている特徴なのであり、文学作品を鑑賞する魅力でなければならないはずである。

本稿では、多義的な語が使われている個々の場面において、その文脈に最もふさわしい意味を規定してゆこうとしてきたわけではない。むしろ複数の意味、それも近しい意味のみならず、一見すると正反対とも思われるような複数の意味が絡み合って織り成している、この物語全体の意味を受け止め、翻訳では超えられない壁を当時の翻訳者がどのように処理してきたのか、という点を比較してきたものである。それぞれの翻訳者がさまざまな工夫をして、翻訳の読者に作品を伝えようとする努力がみとめられ、自国の先人の素晴らしい作品を世の中に広めようという試みは十分に評価に値する点だと考えられるが、やはり翻訳には翻訳なりの限界を感じるとともに、原作者である Chaucer の、ことばを操る巧みさを感じずにはいられない。

何をもって、ある書かれたものが「文学」と呼ばれうるのか、また、ある「文学作品」を文学たらしめている性質つまり「文学性」とはどのようなものなのか、さらにそもそも、「文学」と「文学以外」というものの境界線自体が存在するのか、ということは現代においてもその議論は尽きない。その性質を考え合わせても、この先決着を見ることはおそらくないであろう。しかし今回の研究を通じて、「文学性」というものの一端を垣間見ることになったのではないかと考える。ある作品が長い年月を経ても多くの人に愛され、脈々と読み継がれてゆくためには、ある特定の時代だけに理解されるようなものではなく、どの時代においても受け入れられるような、ある種の普遍的な性質が必要である。しかしその際の読者の解

釈は、必ずしも作者の意図や書かれた時代の解釈と一致していなければならないというわけではない。いつの時代に読まれたとしても、その時代ごとの解釈、ひいてはその時代に生きる読み手ひとりひとりの経験や社会環境を基盤とした独自の解釈でよいのである。なぜなら「文学の魅力というものは各個人が引き出していくことに意義がある」（高野 2000:105）からである。そのためには読者にある程度の自由な解釈の可能性を与える必要がある。その最たるものが本稿の中心テーマとして取り上げた多義語 “hende” や “sely” である。多義的だからこそ、あらゆる時代に生きるひとりひとりの読者に、その語の解釈の楽しみを与えてくれるものであり、この点が *The Canterbury Tales* を「文学」たらしめている大きな性質の1つであると考えるのである。しかし反面、翻訳を比較対照させることによって、このような性質を翻訳で扱う難しさを痛感するものである。近年は若者の文学離れが進んでいると言われている上、教育現場では「英語」そのものの知識の教授に偏る傾向にあるのだが、「英語」を学ぶのではなく、「英語」という道具を使って学生ひとりひとりが、より主体的に文学に向き合い、自分で考えて解釈する楽しみを学んでほしいと切に願うものである。

Bibliography

Texts

- Anonymous (1791) ‘THE MILLER’S TALE. FROM CHAUCER.’ in Bowden, ed. (1991) pp. 167-176.
- Cobb, Samuel (1712) ‘THE CARPENTER of OXFORD: OR, THE MILLER’S TALE.’ in Bowden, ed. (1991) pp. 14-21.
- Smith, John (1713) ‘The Miller’s TALE FROM Geoffrey Chaucer.’ in Bowden, ed. (1991) pp. 23-30.
- Speght, Thomas (1602) *The Workes Of Our Ancient and learned English Poet, Geffrey Chaucer, newly Printed : To that which was done in the former Impression, thus much is now added. 1 In the life of Chaucer many things inserted. 2 The whole worke by old Copies reformed. 3 Sentences and prouerbes noted. 4 The signification of the old and obscure words prooued: also Characters shewing from what Tongue or Dialect they be deriued. 5 The Latine and French, not Englished by Chaucer, translated. 6 The treatise called Iacke Vpland, against Friars: and Chaucers A.B.C. called La Priere de nostre Dame, at this Impression added*, London: Adam Islip.

References

- Beichner, Paul E. (1960) Characterization in the *Miller’s Tale* in Schoeck, ed. (1960) pp. 189-200.
- Benson, Larry D. (1987) *The Riverside Chaucer* 3rd ed. Great Britain: Oxford University Press.
- Bowden, Betsy, ed. (1991) *Eighteenth-Century Modernizations from the Canterbury Tales*, London: D. S. Brewer.
- Brewer, Derek ed. (1978) *Chaucer: The Critical Heritage, Volume 1 1385-1837*, London: Routledge & Kegan Paul.
- Brown, Sarah Annes (2005) ‘Women Translators’, in Chapter 3: ‘The Translator’ of Gillespie and Hopkins, eds. (2005), pp. 111-120.
- Cheralier, Jean and Alain Gheerbrant (1996) *Dictionnaire des Symboles*, translated by Nisaburo

- Kanemitsu et al. (1996), Tokyo: Taishukan.
- Cirlot, J. E. (1983) *A dictionary of Symbols 2nd*, translated by Jack Sage (1983), London: Routledge and Kegan Paul.
- Clebert, Jean Paul (1971) *Dictionnaire du symbolsme animal*, translated by Nobuo Takeuchi (1989), Tokyo: Taishukan.
- Comay, Joan (1980) *Whos' Who in the Old Testament Together with the Apocrypha Volume 1*, Bonzana Books.
- Cooper, Geoffrey (1980) "'SELY JOHN" in the "LEGENDE" of the *Miller's Tale*', *Journal of English and Germanic Philology* 79, pp.1-12.
- Davis, Norman, Douglas Gray, Patricia Ingham, Anne Wallace-Hadrill (1979) *A Chaucer Glossary*, New York: Oxford University Press.
- De Vries, Ad (1976) *Dictionary of Symbols and Imagery 2nd*, Amsterdam: North-Holland.
- Dryden, John (1958) [1790] 'Preface' to *Fables Ancient and Modern, Translated into Verse from Homer, Ovid, Boccace, and Chaucer: with Original Poems*, in James Kinsley, ed. *The Poems and Fables of Dryden*, London: Oxford University Press, pp. 520-539.
- France, Peter, ed. (2000) *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press.
- Gillepsie, Stuart and David Hopkins eds. (2005) *The Oxford history of literary translation in English Vol. 3. 1660-1790*, Oxford: Oxford University Press.
- Gillespie, Stuart and Penelope Wilson (2005) 'The Publishing and Readership of Translation', in Chapter 1: 'The Place of Translation in the Literary and Culture Field, 1660-1790' of Gillespie and Hopkins, eds. (2005) pp. 38-51.
- Greenbaum, Sydney, ed. (1985) *The English Language Today*, Oxford: Pargamon Press.
- Greenwood, Maria K. Greenwood (2003) 'What Dryden did to Chaucer's *Kight's Tale*, or Translation as Ideological Input', Rosalyn Voaden et al., eds.: *The Medieval Translator: The Theory and Practice of Translation in the Middle Ages*, Brepols, Turnhout, Belgium, pp. 189-200.
- Hopkins, David (2005) 'Dryden and His Contemporaries', in Chapter 2: 'Theories of Translation' of Gillespie and Hopkins, eds. (2005), pp. 55-66.
- Hopkins, David and Pat Rogers (2005) 'The Translator's Trade', in Chapter 3: 'The Translator' of Gillespie and Hopkins, eds., pp. 81-95.
- Ikegami, Yoshihiko (1967) *Eishi no Bunpo* (Grammar of English Poetry), Tokyo: Kenkyusha.
- Jakobson, Roman (1959) 'On the Linguistic Aspects of Translation', in Reuben A. Brower ed., *On Translation*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, pp. 232-239.
- Jobs, Gertrude (1962) *Dictionary of mythology, folklore and symbols*, New York: Scarecrow Press.
- Johnson, Samuel (1755) *A Dictionary of the English Language*, London: W. Strahan.
- Jones, Richard Foster (1953) *The Triumph of the English Language: A Survey of Opinions Concerning the Vernacular from the Introduction of Printing to Restoration*, Stanford: Stanford University Press.
- Kelly, Louis (2005) 'The Eighteenth Century to Tytler', in Chapter 2: 'Theory of Translation' of Gillespie and Hopkins, eds. (2005), pp. 67-78.
- Land, Stephen K. (1995) 'Universalism and Relativism: A Philosophical Problem of Translation in the Eighteenth Century', in Nancy Streuver, ed. *Language and the History of Thought*, Rochester: University of Rochester Press.
- Lathrop, Henry Burrowes (1967) *Translations from the Classics into English from Caxton to*

- Chapman 1477-1620*, New York: University of Wisconsin Press.
- Machan, Tim William (1988) ‘Chaucer as Translator’, in Roger Ellis, ed. *The Medieval Translator: The Theory and Practice of Translation in the Middle Ages*, London: D. S. Brewer, pp. 55-67.
- Mason, Tom (2005) ‘Chaucer and Other English Poetry’, in Chapter 7: ‘Other Modern European Literatures’ of Gillepsie and Hopkins, eds. (2005), pp. 427-439.
- Matthew, H.C.G. and Brian Harrison ed. (2004) *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford: Oxford University Press.
- Moore, J. L. (1910) *Tuder-Stuart Views on the Growth, Status and Destiny of the English Language*, Halle: Max Niemeyer.
- Nakao, Yoshiyuki (2004) *Chaucer no Aimaiei no Kozo* (Structure of Chaucer’s Ambiguity), Tokyo: Shohakusha.
- Neaman Judith S. and Carole G. Silver (1983) *A Dictionary of Euphemisms*, London: H. Hamilton.
- Partridge, Eric ; Paul Beale eds. (1984) *A dictionary of slang and unconventional English : colloquialisms and catch phrases, fossilised jokes and puns, general nicknames, vulgarisms, and such Americanisms as have been naturalized 8th*, London : Routledge & Kegan Paul.
- Ross, Thomas W. (1972) *Chaucer’s Bawdy*, New York: Dutton & co., inc.
- Schoeck, Richard and Jarome Taylor, eds. (1960) *Chaucer Criticism: The Canterbury Tales*, Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press.
- Spears, Richard A. (1981) *Slang and Euphemism. A Dictionary of Oaths, Curses, Insults, Racial Slurs, Sexual Slang and Metaphor, Drug Talk, Homosexual Lingo, and Related Matters*, New York: Jonathan David Publishers.
- Spingarn, J.E. ed. (1908) ‘Introduction’ in J. E. Spingarn, ed. *Critical Essays of the Seventeenth Century Volume 1 1605-1650*, Oxford: Oxford University Press.
- Spurgeon, Caroline F. E., ed. (1914) *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion (1357-1900), Part I: 1357-1800*, London: Kegan Paul, Trench, Trübner.
- Staeker, James C. (1985) ‘Attitudes towards Language in the Eighteenth and Nineteenth Centuries’ in Greenbaum, ed. (1985), pp. 41-47.
- Steiner, T. R. (1975) *English Translation Theory 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum.
- Takano, Hideyuki (2000) ‘Practical Stylistics (II) —Ninchigengogakuteki na Eibungaku Sakuhin no Kaishaku—’ in *Kaetsu Jyoshi Tanki Daigaku Kiyō* Vol. 79, pp. 103-125.
- Tytler, Alexander Fraser (1907) [1791] *Essay on the Principles of Translation*, London: J. M. Dent and Sons.
- Venuti, Lawrence (2000) ‘Neoclassicism and Enlightenment’, Part I : Theory and History, France, ed. (2000), pp. 55-63.
- Voaden, Rosalynn, René Tixier, Teresa Sanchez Rouza, and Jenny Rebecca Rytting (2003) *The Medieval Translator. Traduire au Moyen Age, Volume 8: The Theory and Practice of Translation in the Middle Ages*, Belgium: Tuunhout: Brepols.
- Welsted, Leonard (1724) ‘Dissertation concerning the Perfection of the English Language, the State of Poetry, etc.’
- Wilson, F.P. (1970) *Oxford Dictionary of English Proverbs* 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Wogan-Browne et al., eds. (1997) *The Idea of the Vernacular: An Anthology of Middle English Literary Theory 1280-1520*.
- Woods, William F. (1994) ‘Private and Public Space in the *Miller’s Tale*’, *The Chaucer Review* 29:2, pp. 166-178.